

平成二十八年三月十四日

大野晉博士は國語學者として令名夙に高く、上代假名遣の研究、岩波古語辭典の編纂、日本書紀の訓讀など偉大なる業績は、定家、契沖、宣長にも比肩せらるべし。逝去の翌年、川村二郎氏「孤高國語學者大野晉の生涯」を上梓、此の度集英社文庫として刊行あり。

國語審議會の實態

大學の理系學部の學部長クラスの副委員長は、『私は國語のことは全く暗い人間でございませうが、これは文部省でいろいろお練り下さつた案でございまして、廣い配慮のなされた案でとてもいい案だと存じます。御意見のある方もいらつしやいませうが、私はこの案に全く賛成でございます。』（「日本語と私」と發言して平然としてゐる。委員の多くが黙つて頷いてゐる。結局原案がそのまま認められて行く。

昭和三十六年、五委員の審議會退場を機に體制改善の第一歩として、中村梅吉文部大臣の「當然の事ながら國語の表記は漢字假名交り文による」との挨拶ありける同四十一年より三期六年に亙り委員として、戦後の「國語改革」が日本文化の「言語的支柱を崩し去る（米國教育使節團報告書）」を憂へての種々御提言あるに、完全無視による封殺を命ぜられけむ副委員長を寧ろ憐れみ給ひけるほどの爲體に、返すく痛恨の念に堪へず。

タミル語起源説

小説家丸谷才一は、大野がタミル語説を發表した時から、「これは當りではないか」と見込をつけてゐた。（中略）しかし、氣懸かりな點が一つあつた。二つの言語には言語の基本の助詞助動詞の間にも對應があるのかといふことである。この對應が立證され丸谷は「大野の説は搖ぎないものになつた」と確信するに至つた。

タミル語起源説は昭和五十四年以來亡くなるまでの三十年に及ぶ御研究を仰ぎ見るのみ。素人吾僭越にも按ずらく、日本語の成立は縄文末期にして、稲作の普及に劃期的の効果を齎せりと考へ得べく、その稲作關聯語彙にタミル語との對應多數あり（「日本語の起源」とならば、タミル語説の優位を信じたし。但し後日、土田龍太郎先生よりタミル語の成立は縄文末期までは到底遡り得ず、タミル語説には無理ありとの御教示を賜る。

最晩年の御述懐

生徒に作文を書かせ、家に持ち歸つて誤字を訂正し、批評を加へる。さういふ先生を増やすことに、僕はもつと時間とエネルギーを使ふべきであつた。さうしておけば、日本もこんなひどい國にならなくてすんだかもしれない。

我が半生には「さういふ先生」は數多く、社員時代の上司、先輩にも之有るも、後輩には「かゝる指導受けたることなし」と感謝あるほどの激減ぶりは國語教育の變質を物語り、先師の慨歎も然ぞと思はるゝも、類稀の學識と才能とはなほ日本語起原の探索に充つべく、一般父兄や教師の本來擔ふべき重要任務を輕視せしめたる「話すこと・聞くこと」を最重視する戦後の教育價値觀（學習指導要領）こそ問ひ直すべけれ。

（引用文は口語のまま、表記は地の文に統一）（平成二十八年三月 再受附）